

寅彦と子規と彗星地球衝突説

野村 学

はじめに

寅彦日記に気になる記述をみつけた。明治31年6月25日の日記である。

「(略) 夕飯后田岡を訪ふ 五藤も来り居り。明年地球と彗星と衝突の説に就き大気焔を吐き帰りて化学復習」(※1)

ここにある「地球と彗星と衝突の説」とはいったい何だろうか。「明年」といえば明治32年のことである。また「大気焔を吐き」ともあるが、いったいどんな気焔を吐いたのか。この興味深い日記にはずいぶん前から気がついていたが、そのままにしておいたところ、最近あることをきっかけに寅彦の吐いた「大気焔」の内容を推測することができたのでここに紹介したい。

明治32年、彗星地球衝突説

そもそもこの彗星衝突説とは何か。わたしは当初ハレー彗星のことだろうと安易に考えた。明治時代、ハレー彗星の接近により地球上の酸素がなくなるなどという噂が広がったということのを何かでみた覚えがあったからだ。夏目漱石も「丁度ハレー彗星の尾で地球が包まれべき当日を、何の変化もなく無事に経過したほどあっけない心持がした。」と記している(※2)。しかし、改めて調べてみると、ハレー彗星が地球に接近したのは明治43年(1910年)のこと。時期がずいぶんと違う。ハレー彗星ではない。そこで明治32年に地球に接近した彗星がなかったか、改めて調べ直すと、テンペル・タットル彗星が浮かび上がってきた。

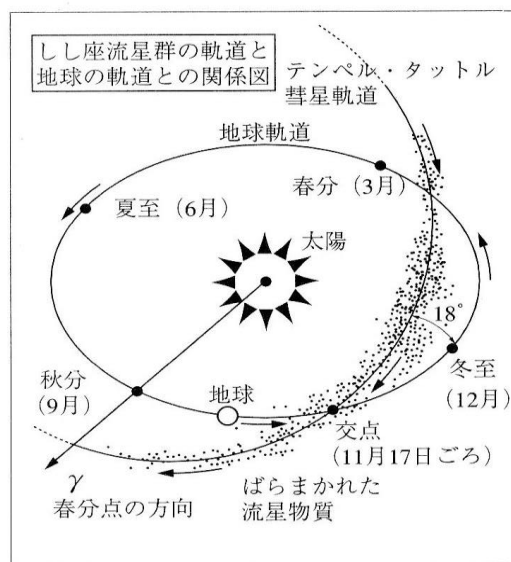


図1 しし座流星群の軌道と地球の軌道との関係図(『土佐天文散歩』より)

テンペル・タットル彗星は33.2年周期で地球とその軌道が交差する短周期彗星で、接近の前後に獅子座流星群の大発生をもたらすことで有名である(図1)。例えば、高知(土佐)では江戸時代の天文学者・谷泰山が1698年の大流星群を記録している(※3)。国立天文台のホ

ームページによると (<https://www.nao.ac.jp/>)、1799 年、1833 年、1866 年、1966 年の彗星接近時に併せて激しい流星嵐が観察されたそう。特に 1799 年の接近時にはヨーロッパで 1 時間に 70 万～100 万個 (!) の流星が観測されている。2001 年 11 月に日本で観測された獅子座流星群は、1 時間あたり 1000 個程度であったそうであるから、「70 万～100 万」という数字は文字通り桁外れのものである。問題の 1899 年 (明治 32 年) はその流星群をもたらすテンペル-タットル彗星の巡ってくる年であった。この彗星の回帰が噂の原因とみて間違いないだろう (ただし結局この年は、彗星は見逃され、流星群も発生しなかったようだ)。

子規、「星」を書く

ところで、この彗星地球衝突説については正岡子規も文章に残している (※4)。それが明治 32 年に発表された随筆「星」である。以下に引用する。

「(略) 今年十一月彗星と地球と衝突する由外國の事迄は構はれずとも日本だけ助かる工夫は無きやと心配氣にいへばある人髯を撫でゝ、それは安き事なり、日本といはず世界中の大砲に丸をこめて彗星の近づくや否や一時に打つかゝらんには、いかな彗星も地球と衝突せざる前に粉な微塵になつて飛び失せなん。これがために世界中の彈丸硝藥一時に盡きて少くも十年が間はいくさの起る氣遣も無く天下太平我々枕高うして寝るべしと星を指したうやうに言ひける。」 (※5)

「星」は明治 32 年 10 月、俳誌『ホトトギス』に発表された。11 月には彗星が衝突するのだから差し迫った状況である。子規が「助かる工夫は無きや」と心配げに訊ねるのももったもなことだ。この時期、子規の病状は相当に厳しい状況であった。何せ「毎日の包帯のとりかえには大声をあげて泣き申し候」 (※6) というあり様である。そのような中で地球の行く末を心配げな表情で訊ねる姿を想像すると、なんだか切なくなる。

それはさておき、わたしがここで注目したいのは、文中に登場する「ある人」のことである。すなわち、この「ある人」こそ寺田寅彦ではないかと思うのだ。以下、そのように推測する理由を述べてみたい。

寅彦、子規を訪ねる

明治 32 年 9 月 5 日に、寅彦は子規を訪ねている。子規の親友であり、寅彦の師である夏目漱石に紹介されて、初めて訪れたものだ。このとき漱石は熊本である。訪れた時の様子を寅彦は未発表ながら「根岸庵を訪う記」として残している (※7)。「根岸庵を訪う記」は、子規の口から出る豊富な話題や子規の暮らす子規庵の様子を書き留めた貴重な記録である。子規

庵での体験を一日の時間経過の中に配置することにより、読む者をして“かけがえのない一日”という感を強く抱かせる。

さて、ここでのポイントは、子規が「星」を発表する直前に、寅彦が子規を訪ねていることである。これまでの動きを時系列に整理しよう。

年 月 日	出 来 事
明治 31 年 6 月 25 日	寅彦、地球彗星衝突説に就き友人に気焰を吐く
明治 32 年 9 月 5 日	寅彦、根岸に子規を訪ねる
同年 10 月 10 日	子規の「星」が『ホトトギス』に掲載される
同年 11 月	彗星衝突の予想時期 ※結果、衝突せず

これを見ると、明治 31 年の 6 月には既に地球衝突説が広まっていたことが窺える。そしてこの衝突説に対して寅彦は友人に気焰を吐くような持論を持っていたことも分かる。このような状況の中で寅彦は子規を訪ね、対談した。彗星衝突は 2 ヶ月後に迫っている。二人の話題に果たして子規が関心を寄せる彗星地球衝突説が取り上げられなかったかどうか。「根岸庵を訪う記」には何も記されていないが、わたしは話題に上ったのではないかと考える。この年、熊本第五高等学校を卒業し、東京帝国大学理科大学物理学科に入学した寅彦である。子規は漱石から寅彦の聡明さを聞いていたであろう。「寅彦といふは理科生なれど頗る俊勝の才子にてなかなか悟り早き少年に候」（※8）として漱石が高く評価する理科大学生に、彗星衝突の回避方法を求めたとしても不思議ではない。寅彦にしても病床の子規をなぐさめる意味も込めて求められるままに「大気焰」をここでも吐いたのではないだろうか。

寅彦、「大気焰」を吐く

もしそうだとするならば、すなわち、子規に地球救出法を説いたのが寅彦だとするならば、寅彦が友人に吐いた「大気焰」の内容も自ずから分かるというものである。つまり、

「日本といはず世界中の大砲に丸をこめて彗星の近づくや否や一時に打つてかゝらんには、いかな彗星も地球と衝突せざる前に粉な微塵になつて飛び失せなん。これがために世界中の彈丸硝薬一時に盡きて少くも十年が間はいくさの起る氣遣も無く天下太平我々枕高うして寝るべし」

これが「大気焰」の内容である。

まとめ

以上、推論に推論を重ねてきたが、この仮説は状況を時系列につなげただけのものであり、証明することはできない。併せて、わたしはもうひとつ、この推理の弱点を告白しなければならない。「星」には「ある人髯を撫でゝ」とあるが、実はこの時期、寅彦はまだ髯を生やしていない（写真 1）。この写真は「明治三十二年仲秋」に撮られたもの

（※1）。まさに子規を訪れた頃の姿である。わたしの推論が正しいとするならば、「髯を撫でゝ」については子規の創作と考えなければならない。このことは文の調子をつけるために考えられなくもないが、これも確証はない。



写真 1 寺田寅彦肖像
『寺田寅彦全集第 18 巻』より

以上のように、この仮説には不備が多い。しかし、それでもわたしはこの仮説を捨てきれずにいる。世界中の砲弾を彗星に打ち込んで破壊し、かつ世界から砲弾が尽きて戦争はしばらくなくなるだろうなど、いかにも未来の寒月先生が言いそうなことではないか。なにより寅彦と子規のあいだでこのような会話が交わされたと想像すると嬉しくなるではないか。子規が亡くなるのは明治 35 年 9 月 19 日。この会見から 3 年後のことである。

ということで、今回はやや強引な主張であることを認識しつつ、ひとつの仮説を提案してみた。この件に関し情報をお持ちの方はご教示いただきたい。なお、次のテンペル・タットル彗星接近時期は 2031 年とされている。6 年後、夜空にこの彗星を見つけた際には、寅彦と子規に思いを馳せてみようと思う。

〈参考文献・引用文献等〉

※1『寺田寅彦全集 第十八巻』（岩波書店・1998 年）

※2「思い出することなど」『思い出することなど 他七編』（夏目漱石・岩波文庫・1986 年）

※3『土佐天文散歩』（岡村啓一郎・高知新聞社・1995 年）

※4 子規の彗星衝突説については以下の HP で知り、参照させていただきました。

「土井中照の日々これ好物（子規・漱石と食物とモノ）」中の「子規と赤シャツの星の関係」（2019.03.19）（<https://plaza.rakuten.co.jp/akiradoinaka/diary/201903190000/>）

※5『子規全集 第十二巻 随筆二』（講談社・1975 年）

※6『子規全集 第十九巻』（講談社・1978 年）

※7「根岸庵を訪う記」『寺田寅彦全集 第一巻』（岩波書店・1996 年）

※8『漱石・子規 往復書簡集』（和田茂樹編・岩波文庫・2002 年）